
氷花、凜として咲く

二木了平

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

氷花、凜として咲く

【Nコード】

N8581H

【作者名】

二木了平

【あらすじ】

とある地方都市に存在するお嬢様学園。そこに通う少女、如月礼子。そこで彼女は、奇妙な事件に遭遇する。※完結しました！

プロローグ

この世で人の“記憶”ほど、不完全で不確かなものはない。

とある地方都市の郊外。広大な森の中にその学園はあった。いや、広大な学園の敷地のなかに森がある、と表現したほうがいいかもしれない。俗世間とは隔絶された、完全なる異空間。ここでは若者を熱狂させる“流行”という名の病魔は一かけらも存在しない。あるのは、世界から取り残されたような時間の流れと、どこかの幻想郷を思わせるような空気。

私立 銀聖女学園

それが私、如月礼子きさらぎれいこの通う学校の名だ。

徹底した全寮制管理主義のこの学園は、平日に学園の敷地外に出られないことは言うまでもなく、休暇中以外の休日でも外出するとは許されない。許されるのは家族の訃報くらいだろう。

そんなどこかの無人島じみた隔絶感は、様々な現象を引き起こしやすい。私が体験したある事件も、そんなどうってことのない、どこにもでもあるような現象の一つだったのだ。

2006年 3月

どこまでも冬で、そして、どこまでも冬だった。

土地柄、雪は年に数回しか降らない。その上、昨今のヒートアイランド現象も相まって、山の中にあるこの学園でも平均気温が若干上がったようである。そんな状況にもかかわらず、この日、雪が降

った。

現在の学園の状況は、いわゆる「春休み」というやつである。次の学年に上がる準備期間。誰のための休みかといえば、躊躇なく先生活のためだと言えるだろう。……この学園に、生徒のためを思っている教師なんてほとんどいない。どこまでも拝金主義で、自己中心的な奴らばかりだ。通ってさえいれば将来には困らない、銀聖、というネームバリュー。一般人にはとてもじゃないが払えない高額な学費にも関わらず、それに魅かれてやってくる親。その親が落とす金に群がる教師。内情を知ってしまえば、絶望的なほど展望のない学園だというのに、それが公にされることはない。理由は簡単で、要するに力を持った保護者たちがそういった情報を握りつぶしているのだ。

そんな学園に何故私が通えているかというと、それにはいろいろと理由がある。その中でも一番大きな要因は、私の母が名の知れた弁護士であることだ。敏腕弁護士、とはああいっただものなのだろう。五ヶ国語を操り世界で活躍するロイヤー。それが母の職業だ。だから生徒の器量や礼節より、親の収入が重要なこの学園にもすんなり入ることができた。そういうと私には器量や礼節が欠けているように思われるかもしれないが、決してそういうわけではないと、一言断っておこう。

その前日

冬の落ち葉で敷き詰められた林の小路を三十分ほど歩いて、私は寮に戻ることにした。春も近いというのに、真冬ほどの冷気が纏わりつく。寮の談話室には、帰省しなかった生徒が数人、暖炉の前で談笑していた。温かな湯に浸ったような幸福感を味わいながら、もはや不要となったマフラーを綺麗にたたんでソファの脇に置いた。ごう、と暖炉の火が燃えている。紅く放たれる火花を眺めて、なんとなく私は、月夜に映える真夏の蝶の姿を思い出していた。

「如月さん」

そう名前を呼ばれて、私は後ろを向いた。制服姿がよく似合う、髪の長い生徒。あの生徒は確か。

「なんででしょうか、赤羽さん」

あかばね まな

赤羽真奈。おそらくこの学年で最も有名な生徒の一人だ。一年の時は生徒会書記を務め、二年の現在は生徒会長を務めている。入学当初から成績もトップの座を守り続け、他の生徒、特に後輩からよく慕われている。生憎、私は二年の時に転校してきた身であったりするので、彼女についての情報はルームメイトからの受け売りではない。しかし、それでもこうして対面していると、彼女の育ちがとても良いことは感じ取れる。

「例の件、考えてくれたかしら」

ソファから立ちあがろうとした私を手で制して、私の向かい側に座った。ほのかにいい香りが漂ってきた。

「どの件でしょうか？」

「いやですわ。私が貴女にお話しした件といえば、生徒会に関する件しかないでしょう」

春休みに入る前、私は彼女から生徒会副会長の職を打診されていた。

「ええ、考えましたわ。考えた結果、あの件はお断りしようかと」

彼女の視線を逸らすように、私は乱れていた髪を軽く振り払った。
「そう……。一応、理由をお聞きしてもよくって？」

「構いませんよ。ですがその前に、コーヒーを頂こうかと。実は私、先ほど寮に戻ってきたばかりで、まだ手の震えが収まらないのです」「そうでしたの。では私が」

赤羽はおもむろに立ち上がると、暖炉のそばに用意されているコーヒーセットの方へ向かった。しばらくすると、かりかり、と乾いた音が聞こえてきた。コーヒー豆を挽く音だ。簡易コーヒーセットも用意されているはずなのだが、お嬢様はそんなことはしないらしい。

「ミルクは必要ですか？」

「いいえ、角砂糖を一つだけ」

目の前の机にカップを差し出された。私はそれを手にとって、冷めないうちに口をつけた。赤羽はそれを確認すると、話の続きを始めた。

「理由をお聞きしても？」

赤羽は真剣な眼差しで私を見た。これはもう、はぐらかすことはできそうにない。

「私はこの学園に来て、まだ一年も経っていません。わからないことがたくさんありますし、何より“人望”という面が私には致命的に欠如しています。いくら現生徒会長の赤羽さんの口添えがあったとしても、他の生徒を納得させることは難しいでしょう」

この人事が実行されたとして、一番抵抗感を示すのは彼女の親衛隊とも比喻すべき後輩たちであろう。私はコーヒーを一口飲んで、机の上に置いた。

「それに、私のようなアウトサイダーが生徒会に入れば、無用な軋轢を生むことは目に見えています。そんなリスクを冒してまで私を生徒会に入れるメリットがあるのでしょうか」

「あります」

赤羽は即答した。それには少し、驚いた。

「私は貴女的能力を高く評価しています。確かに如月さんのおっしゃるリスクはあるかもしれませんが、私はそれ以上に貴女に期待しているのですよ」

「私は赤羽さんが思うような人間ではありませんよ」

それは、礼子の本音だった。その程度の人間が彼女の隣に並んで立てるはずがない。それはもう、決定的な能力の差だ。

「……そうですか。貴女は相当頑固な方のようにすわね。わかりました、今回は諦めます」

赤羽は自分のコーヒークップを持って、談話室を後にした。私は、自分の分を口にしたが、その時にはもうすっかり冷めてしまっていた。

「あれ、美夜、今日からだっけ」

「はい、そうですよ」

「実家は東北の方だったかしら。確か……新潟？」

「岩手ですよ、先輩」

金子美夜は私のルームメイトの下級生だ。この学園ではルームシスター制度というものが採用されている。上級生と下級生が相部屋となる制度だ。

美夜は制服から私服に着替え、帽子とマフラーを着け、彼女の身の丈には不相应の大きなキャリーバッグを引いていた。

「帰省したらどうするの？」

「うーん、たぶん、家の手伝いをさせられるんだと思います」

「実家は旅館だったよね」

美夜の給仕姿を思い浮かべて、少し吹き出しそうになった。

美夜の実家は江戸時代から続く老舗旅館だ。そういう店は大概、伝統に固執すぎて経営に柔軟性が欠けるのだけれど、彼女の実家はサイドビジネスなどにも程よく手を出して富を築いた、珍しいケ

ースである。

「そういう先輩は帰省しないんですか？」

「私？ 私は帰らないわよ。帰ったって、誰もいないから。何もしなくてもご飯が出る分、学園に残った方が楽だからね」

美夜は、はっとして複雑な表情になった。たぶん、何か勘違いをしている。

「あの、すいません。なんか踏み入ったことを聞いてしまって――」

「気にしないで、毎回のことだから」

美夜の頭を軽くなでる。

「ちゃんと事務には連絡したの？ 美夜、そういうところ、ぬけているから」

「あう。今回は大丈夫です。思いつく限りのことはすべてしましたから、先輩のご心配には及びませんっ」

「……まあいいわ。美夜がそういうのなら、そうなのでしょう」

その思いつかないところが多すぎる、と思うのだけれど、あえて何も言わない。荷づくりも済ませてしまっているから、あとは彼女の自己責任だ。

「実家には二週間ほど滞在する予定です。持ち込み可能な限りのお土産は持って帰ってきますから、期待しててくださいね」

「わかったわ。楽しんでらっしゃいね」

寮の入り口で小さな背中を見送った。ちょこちょこ右に左に揺れる背中を見て、やっぱり少し、不安になった。

――この十五分後、部屋でくつろいでいる私のところに美夜から電話がかかってきた。机の引き出しの中に岩手行きの切符を忘れたが、時間がなくて新しい切符を買ったので心配しないでほしいという内容だった。

一日目

部屋の窓から見えるのは、木の葉がすっかり落ちてしまった樹と、骨組みだけが取り残された鳥の巣。二段ベッドの上に横になって、私は後輩から借りた本を読んでいた。新進気鋭の作家による推理小説。この学園での唯一といっていい娯楽だ。学園内に持ち込める図書もある程度規制されている。風紀を乱すような書籍は禁止されているが、芸術性の高い作品は許されているようである。

「如月先輩、よろしいでしょうか？」

扉の向こうからそんな声が聞こえた。

「どうぞ、入ってください」

錆びついた蝶番の開く音が部屋に響く。

「失礼します。如月先輩、高柴先生が呼びですよ」

「……そう、わかったわ。すぐに行きます」

その下級生はロボットののような動作で頭を下げると、その場を立ち去った。読んでいた本に枝折を挟んで閉じ、枕元に置く。この本は、美夜から借り受けたものだった。美夜はこの学園にあって、最も“世間”というものを知っている。彼女は銀聖学園に染まらない芯の強さを備えている。そういう生徒が、私は好きだ。

学園の廊下を歩く。春休みともあって、生徒の姿はまばらだ。比的には下級生の割合が多い。上級生はある程度遊び方というものを知っていて、中には帰省と偽って旅行に出かけたツワモノもいる。……まあ、そういう生徒はたいいてい、私と同じように転校生だったり、高等部から学園に入った生徒だったりする。学園生活が窮屈でたまらない、そんな生徒が羽目を外そうとするのだ。中等部から学園にいる生徒はそのあたり、世間慣れをしていないから羽目を外そうにも外せない。もしくは元々そんな考えを持たないコチコチな人間が出来る。

高柴教諭の研究室は、教室棟の一角にある。この学園に在籍して

いる二人しかない男性教諭のうちの一人だ。教職とはいえ女学園内に男を入れることは、獅子身中の蟲、普通ならあり得ないことなのだけれど、ただ彼に限っては例外であろう。もう一人の教諭は現在、海外の姉妹校に赴任中なので考慮はしない。

彼の部屋の扉は常に開かれている。入り口に立って、中を窺った。

「……ああ、如月さん。待っていましたよ」

「遅くなりました。失礼します」

高柴教諭の研究室は本棚に囲まれている。担当科目は倫理。そして司書の仕事も兼ねている。教諭はちょうど分厚い本を数冊、本棚にしまっているところだった。

「いえ、決して遅くはありませんよ。私が委員の生徒に頼んだのが九分二十二秒前。その生徒が貴女の部屋までたどり着くのに四分二秒、貴女が部屋から僕の研究室に来るまで三分三十三秒。空白の一分四十七秒は、貴女が部屋を出る準備をしていたと考えられます。教師の呼び出しに応えた誠意としては、十分合格点を与えられるでしょう」

本をしまい終えると、私を部屋の中へ促した。

「ああ、そちらの椅子へどうぞ。何か飲みますか？　とはいっても生憎、この部屋にはコーヒーしかないのですが」

「そうですね……はい、頂きます」

たかしばきよういちろう

高柴恭一郎は、不思議な意味で生徒たちに人気がある。先の発言からも感じ取れるように、なんともミステリアスな雰囲気醸し出しているのだ。コーヒーメーカーの駆動音が微かに聞こえてくる。

「インスタントしかないのですが、大丈夫ですか？」

「ええ。大丈夫です」

すると、高柴教諭は含み笑いをした。無理やり笑いを堪えているようにも見える。

「ふふっ、その表情は、なかなか興味深い。コーヒーを飲んで不快になった経験でもあるのですか？」

「そんなおかしい表情をしていましたか」

「はい」

高柴教諭は、私にコーヒーを差し出した。その傍らには小さな砂糖壺も添えられていた。私が角砂糖を一つ、コーヒーに入れていると。

「では、査定の結果を報告しましょうか」

そう言って高柴教諭は机の中から一冊の本を取り出した。私が美夜から借り、その後寮母に没収されていた文庫本だ。学園に不相応だと判断された本は、その査定のために高柴教諭のもとへ行く。そこで最終的に返却か没収かを判断されるのだけれど、今まで、こういったケースで高柴教諭に没収された本は存在しない。

「“路地裏の猫”。2005年3月16日に発行された本格推理小説。作者は言仲鞍馬。さて、どうしてこの本が手元にあるのか、私には理解できません」

高柴教諭は目を細め柔和な表情で私を見た。

「それでは——」

「はい。速やかにお返しします——と、言いたいところなのですが」

引き出しの中から一度持ち上げた本を机の上に静かに置いた。

「その前に少し、質問してもいいでしょうか？」

「……ええ、どうぞ」

「それでは失礼して——この本は、どのようにして手に入れたのでしょうか？」

「それは、」

後輩の美夜から借りた、というのは簡単だ。しかし、寮母に没収されてしまったのは私の落ち度であるから、万が一にも彼女に迷惑がかかるようなことになってはいけない。

「この学園に入学する前に、私物として持ち込んだものです」

「発行日は2005年3月、となっています。これについては？」

……そうか。学園内に持ち込む私物は毎回寮母によってチェックされる。この本の発行日を見ると、その年の春休み明けか夏休み

明けのどちらかの機会を持ち込まれているはずだ。普通の生徒なら、学園に戻ってくる際に厳しいチェックが入る。そのときに何故没収されず、今になって没収されたのか。それを高柴教諭は訊ねている。美夜のやつ、帰ってきたらとちめて、そして私に感謝させてやる。「私は、2005年の4月中旬に、例外的に転校してきた生徒です。覚えている限りではそんなに厳しいチェックを受けては、いません」「なるほど、噂の転校生は貴女でしたか。事情は理解しました。ですがその際、自己審査をして寮母に申し出るべきでしたね」

「ですが……」

私の反論を手で制して、高柴教諭は話を続けた。

「はい、それが理不尽である、ということとは私も理解しています。ですが、残念なことに、不確定ですが一度チェックを免れた過去と、今回没収されたという事実が残ります。それに対して、心苦しいですが私は何らかのペナルティを貴女に与えなければなりません」

「ペナルティ、ですか」

「そうです」

高柴教諭は、私を正面から見据えた。

「今日から一カ月の間、この書籍を私の研究室から持ち出すことを禁じます。それが今回のペナルティです」

低く透き通る声で、高柴教諭はそう告げた。

「この程度であればそれなりに寮母の顔も立てられるでしょう。実は今回、彼女からは厳しい処分を打診されていたのです。しかし本を愛する私としては、それはあまりにも残酷な仕打ちでした。コーヒーをどうぞ」

そう促され、私は冷め始めたコーヒーを口に含んだ。

「“路地裏の猫”。推理小説としては良作です」

「お読みになったのですか？」

「はい、勝手に。気に障るようでしたら、謝ります」

教諭は私に向かって軽く頭を下げた。

「いえ、そんな……」

ほっとした表情で彼はほほ笑んだ。そして、机の上にある本に手を置いた。

「この本の作者、言仲鞍馬という名前が初見でしたので、つい興味を魅かれて読んでしまいました。——失礼、余計な話でしたね。ペナルティは先ほど言ったとおりです。もし、一か月待てずにこの小説の先を知りたいという衝動に駆られた時は、いつでもここにきて、読んでもらって構いません。この部屋の鍵は常にかかっていますので」

どこまでが冗談でどこまでが本気かわからない笑顔で高柴教諭はそう言った。たぶん、彼はいたって真面目なことを言ったのだろうけれど、私にそれを確認する術はなかった。

高柴教諭の研究室を後にする頃には、もうすっかり日が落ちていた。あの後、しばらく彼と雑談をしていて、コーヒーも結局二杯も頂くこととなったのだ。この時間帯になると、外に出ている生徒はいない。談話室も鍵がかけられている時間なので、皆、各々の部屋へ戻って雑談でもしているのだろう。

寮には二か所、入口がある。談話室を通る表口と、裏庭から入る裏口だ。午後六時以降は談話室の鍵を閉められてしまうため、裏口から寮に入る。厳密に言えば、食堂の勝手口からも入ることができるのだが、そこは厨房を通らなければいけないので、利用する生徒は、まず、いない。

私は教室棟から一旦外へ出て、ぐるりと寮の裏側まで回ってから中へ入る。私の部屋は、二階の一番手前にあるのだが。

「これはいったい、何事？」

階段を上がったところに人垣ができていた。

「ねえ、何があったの？」

近くにいた生徒を一人捕まえて、話を聞こうとすると。

「如月さんよ！」

誰かが突然、私の名前を叫んだ。すると人垣がすっと開かれた。まるで、モーゼの十戒を見ているようだった。私はその中心を歩き、扉の開かれた自分の部屋を見た。見て、そこで何が起こっていたのか理解するのに、不覚にも数十秒かかってしまった。

私の私物という私物が部屋中に散乱していた。私の教科書も、衣類も、小物も、何もかもが無残な姿を晒していた。ベッドのシーツは鋭利な刃物で切り裂かれ、教科書類は引きちぎられ、衣類はわずたに裂かれ、小物は修復不可能なほどに壊されていた。

「いったい誰が、こんなことを……」

だけどそれは、この一連の事件の始まりに過ぎなかった。

『だけどこれは、この一連の事件の始まりに過ぎなかったの、だあゝ……なんちって』

「あのねえ、美夜。私、本当に困っているのよ」

『あう、すみません。で、結局どうなったんですか？』

「とりあえず今日は、お隣の部屋に泊めてもらうことになったわ。ちようど片方が帰省しているから」

あの後、駆けつけた寮母と話し合い、取りあえず部屋に鍵をかけて、その日は落ち着いたのだった。

『けど、私が帰省した次の日にそんな事件が起こるなんて……』

「まあそれは良かったと思っているけどね。美夜がいたら、ややこしくなりそうだし」

『むう、それ、ひょっとして私、馬鹿にされてます？』

「心配しているのよ。美夜がもしあの光景を見ていたら、うん、一発でパニックに陥ると思う」

それは間違いないだろう。そのくらい、あれは悲惨な光景だった。『で、誰の仕業かわかったんですか？』

「さあね。相当私に恨みがある人物なのでしょうけど、思いつかないし、正直、あまり興味はないわね」

『そうですか、よかったです。もし先輩が本気で犯人捜しを始めたら、たぶん収拾つかなくなるでしょ？ 先輩、その犯人を破滅させかねませんかね』

美夜との通話が終わって私は受話器を置いた。美夜はよく私のことをわかつている。でも、美夜にはああ言ったけど、このままで済ますはずがないじゃないか。これは私に対する明確な悪意だ。ならば、それは排除しなければならぬ。

「さて、と」

自然と笑みが零れる。どうしよう、楽しくなってきたよ、私。

二日目

寮母から自室の鍵を預かって、一日ぶりに惨劇の現場と対面する。早朝、まだ誰も起きていないうちに済ませてしまおう。無論、現場検証である。

改めて見るけれども、相当ひどい。たぶん、ほぼ100%廃棄処分しなければならんだろう。まあ、思い入れの持ち物とかはなかったので、捨てることに抵抗はないが、それでも自分の持ち物を壊されたことに、それなりに憤りは感じている。

ベッドの周辺に散乱したガラスの破片を踏まないように注意しながら部屋を検証する。しかしまあ、犯人も随分と手の込んだことをしてくれたものだ。引き出しを一つ一つ開けて、私の荷物を端から端まで傷つけている。驚くべきことは、当時そこにあって傷つけられなかったものが一つもない、ということだ。無事だったのは、そのとき身につけていたこの制服と肌着類、そしてベッドの下に落ち込んでいた小さなくまの人形くらいか。尤もそれは私のものではなく、美夜の落としたものだったわけだが。

一通り見分して、もう何も情報が得られないだろうと判断すると、私は部屋を片付け始めた。半分ほど片付け終わったころ、意外な人が私の部屋を訪問してきた。……いや、意外というのは間違いだ。これだけの大事件が起こって、むしろ今まで顔を見せなかった方が意外、と言うべきかもしれない。

「今回は大変でしたわね、如月さん」

赤羽真奈は、ひどく私に同情するような表情でそう言った。

「いえ、たいしたことではありませんよ」

「お掃除、お手伝いいたしましょうか？」

「大丈夫です。もう半分も残っていませんから」

赤羽は私の切り裂かれた教科書に手を伸ばしかけたが、私がそういうと手を引っ込めた。

「しかし、いったい誰がこんなひどいことを」

赤羽は両手を口にあてている。

「生意気な転校生を戒めるための嫌がらせでしょう。気にすることはないと思っています」

「そうですね……もし、何か入用なものがあれば遠慮なく言ってください。できる限りの協力はさせていただきます」

「ありがとうございます。ですが、おそらく赤羽さんの手を煩わせることもないでしょう。たかが物です。すぐになんとかかりますよ」
振り向いて、笑って見せる。

「養護の先生のご好意で、今日からしばらく保健室で寝起きすることになりました」

「そうでしたの。差し支えなければ私の部屋の空いているベッドをお貸ししてもよいと考えていたのですけれど」

「気持ちだけ、ありがたく受け取らせていただきます」

赤羽とはそれからしばらく雑談して、別れた。振り向きざまに見せた笑みが、何とも印象的だった。

私は保健室へ行き、しばらくお世話になる養護教諭に挨拶をする
と、ノートに今回の事件の詳細をまとめ始めた。

「問題は、犯行時刻か」

私の部屋が荒らされたのは、私が高柴教諭の研究室にいる間だ。
あの場所いた時間はおよそ一時間半だったと思うのだが、正確な時間
を覚えているわけではない。

「昨日は確か、裏口から寮に入ったのよね」

談話室が寮母によって閉められるのは午後六時。それは同時に、

表入口も閉ざされることを意味する。

「うーん、これだけじゃ埒が明かないわね」

仕方がない、聞き込みでしょう。



現場の第一発見者に話を聞くことができた。高等部一年で、談話室から見て、私の部屋より奥三つ隣に部屋がある。以下、彼女の証言である。

「談話室から部屋に戻ろうとしていた時です、あの部屋の違和感に気付いたのは。最初、自分の部屋から談話室に向かった時は、そこに行くまでの扉は全て閉じられていたと思います。その時の時刻が、確か五時を回ったあたりだったと思います。それからしばらく友人と談話室にいて、ちょっと早めに部屋に戻ろうということで、五時四十五分に談話室を出ました。はい、その時は談話室の時計を確認しました。間違いないです。それで、行くときは閉まっていたはずなのに、帰る時は一つの部屋だけ扉が開いていました。いえ、全開というわけではありませんでしたが、中の様子が窺える程度には……はい、怪しい人影とかは見えていません」

談話室から私の部屋までは、普通に歩いておよそ二分かかる。そのころに怪しい人影は見なかったとの証言から、遅くとも五時四十五分には犯行が完了していたことになる。となると次に重要なのは、私が部屋を出た正確な時間だ。

「私もその話は耳にしました。大変でしたね。その上、私が貴女とここにいる間に起こってしまったなんて……申し訳ないです」

「いえ、高柴先生に責任はありませんから」

「そうですか、そう言っていたけると、楽になります。――

さて、貴女がここへ来た時刻、でしたね」

「はい、そうです。できれば詳しい時間がわかればいいと思っています
ます」

続いて私は高柴教諭にも話を聞いていた。彼なら、あの時の時間を記憶していると思ったからだ。そしてその考えは、見事に的中した。

「如月さんが私の研究室を訪れたのは、午後四時四十七分。それから一時間と三十四分、この部屋でお話ししました。そして貴女がここを後にしたのが、午後六時二十一分です」

「随分と正確に覚えているのですね」

「私は出来事の節目には必ず時間を確認、記憶しておく癖があります。これは、そう滅多に間違うことはありません。ある程度は信用してもらっても構わないと思います」

「そういえば、昨日、私が部屋からこの研究室までくる時間を言っていました、あれはどうしてわかったのですか？」

「ああ、簡単なことです。貴女の身長、歩幅等の情報から歩行スピードを計算しただけですよ」

それは、簡単なことなのだろうか？

「そう思われるのも無理はありません」

高柴は苦笑した。

「確実に言えることは、私がいを出して貴女を呼びに行かせた時間と、貴女がこの場所に現れた時間、そしてあなたがこの場所を後にした時間だけです。それ以外には何の意味もない。少なくとも、この事件を調べている貴女にとってはそれで十分でしょう」

保健室のベッドの上に横になって、天井を見上げる。白く塗装された壁に蛍光灯が反射して、少しだけ目が眩んだ。一人で過ごす夜

は、この学園に転校してくる前はごく当たり前の生活だった。

私がまだ物心もついていないとき、両親は離婚した。親権裁判の結果、私は母親に引き取られることになり、それ以来、父親とは会っていない。だから私は父親の名前も顔も知らないまま成長した。立ちあがって、鏡を見る。父を知る唯一の情報。私の中の半分のDNA。しかし、女性という性別が邪魔をして、そこから父の面影を感じ取ることはできそうにない。

二人の話をまとめると、犯行時刻は私が部屋を出た午後四時四十五分から、事件が発覚した午後五時四十五分、その間一時間となる。部屋の状況を思い出す。美夜は春に帰省するとき、私物を一斉に処分する癖がある。必要最低限の物しか持たない主義であるから、昨日の時点での部屋に美夜の私物は無かった。そして私も彼女と同様にあまり物を持たない。一時間の時間があれば、一人でもあれだけの破壊工作は十分可能だ。それに、今回の犯行はおそらく単独犯であろう。私の物を徹底的に壊す、この執念深さは半端ではない。犯人はおそらく、相当な高いプライドの持ち主だ。そんな犯人が他人の助力を乞うてまでこんなことはしないであろう。

「あとは動機、か」

それに関しては、思い当たらない節が無いこともない。私のように学期が始まってから転校してくるケースは、この学園では極めて珍しい。そのあたりの反発感情が、ときどき理不尽な嫌がらせとなって現れることもある。そのほとんどが上級生からのもので、同級生や下級生は比較的私に優しい。だから今回も、上級生による犯行かと思った。

しかし、それにしても執拗過ぎる。私は上級生たちと、直接、接点があるわけではない。部屋をあんなにされるほど何かをした覚えもないし、何より、あんなことをするメリットがない。もし学園方

に発覚すれば、犯人は重い罰を受けるだろうし、最悪退学処分だつてあり得る。たかが生意気な下級生をいじめるためにそんなリスクを冒してまで犯行に及ぶだろうか。

「わっかんないなあ。そもそも、なんで昨日だったんだろう？」

三目

翌日も早朝、美夜から電話がかかってきた。

『どうです、少しは進展しましたか？』

「進展？」

『先輩、昨日はなんだかんだ言っていましたけど、やっぱりやってるんでしょ、犯人探し』

「——まあね。でも、全然、目星も立たないわよ」

『先輩、敵、多そうですね。そんなの、挙げていったらきりがないです』

さらに美夜は恐ろしいことを口にした。

「そうだ、美夜、部屋にくまのぬいぐるみを忘れて行ったでしょう？ あれ、置いた方がいい？」

『くまのぬいぐるみ、ですか。ああ、一年前にもらったやつですね……って言っても先輩は知らないですよ。それ、邪魔だったら処分してもらって構いませんよ』

美夜はあっさりと、ぬいぐるみに対するこだわりを捨てた。

「ねえ美夜、貴女、ぬいぐるみ好きで有名だったとか、そんな事実があつたりする？」

『はあ、そんなことはないですけど、んまあ可愛いものは好きですよ？ 一端の女の子程度には』

なんとも曖昧な返答だった。

「そう、わかったわ。じゃあ切るけど、美夜」

『なんででしょう？』

「こんな早朝に電話をかけてくるの、やめてくれないかしら？ いくら旅館の朝が早くて、この時間しか電話できないからって、相手方のこともちゃんと考えないと、社会人としてやっていけないわよ」

『あう、すみませんでした』

その美夜の反応を聞いて、私は自然と笑みが零れた。

「そうだ、美夜」

『何でしょう？』

「早急に送ってほしいお土産があるんだけど、頼まれてくれるかな？」

『はあ、いいですけど——……わかりました。でも先輩、こんなもの、何に使うんですか？』

受話器を戻す。そこであくびが出そうになったところを噛み殺して、廊下を歩く。眠気覚ましに談話室へ行ってコーヒーでも飲もうかと思ったが、思い直して教室棟のほうへ進路を変えた。

鍵は常に開いている。彼はそう言っていた。それが本当なら、こんな早朝でも入れるはずだ。

その通り、高柴の研究室は開いていた。コーヒーメーカーのスイッチを入れると、本棚を物色し、その中から一冊の本を取り出した。ハードカヴァーの古い本だった。背表紙はおろか、表にも裏にもタイトルらしきものはなかったのに興味を持ったのだ。中を開いて奥付を見る。その作者を見て、ちよつとだけ驚いた。言仲鞍馬、例の本と同じ作者。発行日は、1980年4月、となっている。

「この人、昔から本を書いていたんだ」

ちよつと意外だった。あの本を最後まで読んだわけではなかったけれど、文面からは最近の作家のように感じていたから。美夜も、そういう理由で私に勧めたのだろうけど。

「あれ？ でも……」

高柴は、言仲鞍馬という作家は初見だと言っていた。それともこの部屋にある本は、必ずしも全てが高柴の物ではないということなのだろうか。

その本を抱えて、ソファに深く腰掛ける。本に付着していた埃を払って膝の上に乗せ、表紙を開いた。数枚ぺらぺらと捲ったが、

タイトルらしきものはない。二ページ目からいきなり本文が始まっている。

導入部は、とある少年の話から始まる。小学生でありながら大人にも劣らない天才的な頭脳を持ってしまった少年と、そしてその少年を取り巻く環境の物語。あまりにも飛びぬけていたがために、誰にも理解されなかったが、そんな中、彼は一人の友人を得る。その友人もまた、彼と同じく天才的な頭脳を持つ少女だった。ただ少年と少女はある点で考えを異にしていた。少年は、自らの能力を隠し世間に溶け込むことを肯定し、少女はそれを否定した。そんな中ある日、その少女がある犯罪グループに誘拐される。きっかけは些細な出来事であった。巻き込まれるべき人間が巻き込まれず、巻き込まれるはずのない人間が巻き込まれる。そして少年はその頭脳を駆使し、彼女を救うために奔走する。

切りの良いところで本を閉じる。研究室の入口にさがっている図書貸出帳に自分の名前と日付、そして本のタイトルを書き込む。がこの本にはタイトルが無い。仕方がないので“言仲鞍馬、1980年”と書き込んだ。



如月礼子が高柴恭一郎の研究室を後にしたその十分後、一人の人間が、その研究室を訪れた。その人間は一通り部屋の中を見回すと、最後に高柴の机周りを調べ始めた。ペンたてくらいしかない机の上には触れず、引き出しだけを調べた。まるで最初から、探し物がそ

ここにあるのを知っているかのようだった。そして、一番上の引き出しから一冊の本を取り出した。そのままその本をポケットに滑り込ませ、かつかつと靴の音を響かせながら、入口へと向かう。部屋を出る直前、その人間は貸出帳に目をとめた。それを手に取り、頁を捲る。そして最後の欄を見た。人差指が、そこに書き込まれた名前をゆっくりとなぞっていく。その表情は、疑いようのないくらい、歪な嗤いの形に歪んでいた。



私の部屋に在って唯一無事だった美夜のぬいぐるみは、保健室の窓際に置かれた花瓶の横に並べておくことにした。あのまま放置しておくわけにもいかないし、美夜は処分してもいいって言っていたけど、やはり捨ててしまうには忍びない。なんか高そうだし、それに何となく、捨ててしまっただけにはいけないように感じていた。

教科書類は、まあ授業は無いから新学期までに新しいのを買いなおせばいい。しかし衣類まで例外なく八つ裂きにされていたから、正直どうしようか悩んでいた。普段着はともかく、下着類は、いくら仲のいい友人でも借りるわけにはいかない。しばらくは身に着けていて無事だった一枚でなんとかするしかない。幸い、保健室には洗濯機・乾燥機が揃っている。夜眠るときは、そういうセクシーなことになっているのだけど、うん、これは早急に対策を講じなければ。

と、いうわけで、夜。今日は身に着けていたものを全て洗濯機へ放り込み、カーテンで仕切られた中、自分にあてがわれたベッドに横たわって、再びあの分厚い本を開いていた。よくよく内容を読んでみると、これは誘拐事件を常に少年の視点から描いている。例えば、行動を共にした刑事や誘拐された少女の両親などの心情、行動、

そういったものが全くとっていいほど描かれていない。ただあるのは、主人公の少年がどう考えどのように行動したか、それだけだ。「こんな独りよがりの小説が存在するんだ」

文章の甲乙、表現力に関して言えば、完璧と言っていい出来だろう。だがそこに、読者を楽しませようという作者の意向は感じられない。ただ、事実を淡々と述べているだけ。

「そのあたり、タイトルが無いのと関係があるのかな？」

だが事実こそが、正確で偽りのない真実であることもまた、真理であるのだ。

四日目

この日は雨だった。朝日が昇る前から雲行きはすでに怪しく、日の出と同じタイミングで空は泣き出した。部屋の中まで、雨水が木の葉を叩く音が聞こえてくる。それは私にとって、至極気分の良いものだった。

談話室の大掃除が行われるとかで、立ち入り禁止になっていた。当然のことながら、寮への表入口は使えない。雨に濡れずに教室棟へ行く方法はこれで失われてしまったことになる。私は傘をさし、高柴の研究室から借りた本が濡れないようにして、外の小路を歩いていた。いつもなら乾いた音をたてる足元も、この日に限っては雨音が邪魔をして、濡れた木の葉を踏みつける音さえ聞こえない。空を分厚い雲が覆ってしまつて、あたりはまるで日の沈んだあとの宵の様相を呈していた。

扉は開かれてはいるが、一応ノックをしてから中へ入る。

「失礼します」

「どうぞ……ああ、貴女でしたか」

高柴教諭は椅子に座つて、書類の処理をしていた。

「昨日お借りした本を返しに来ました。と言っても、その時先生はいらっしゃらなかったのですが」

「そうでしたか。貸出帳には名前を記したのでしょう？ それなら問題はないです。たとえ——」

高柴は書類の束を縦にして揃えると、続けた。

「たとえば、その貸出帳に明記が無くとも、基本的にこの部屋の書籍は持ち出し自由です。そもそも我々（きょうし）と貴女方は“信頼”というインタンジブルで関係を取り持つべきなのですから」

最近この関係が薄れてきていることを残念に思いますが、と付け足す。

「信頼^{トラスト}」、ですか。そんなものがあれば、私の部屋は荒らされず

に済んだのかもしれませんが。ですが、これが今のこの学園の現状です」

「確かに、貴女のおっしゃるとおりです。礼節と誠実をモットーとした学園の気風は、もはや失われてしまった。悲しむべきことです」
「でも、そんな理想を持つ先生は、未だにここで教師を続けています。それは何故です？」

高柴は、私を見ることはなく、あくまで書類に目を向けたまま、私の質問に答えた。

「簡単なことです。私はここ以外に居場所がない。帰るべき家も、頼ることのできる友人も、私には存在しない。私にとっては銀聖学園こそが“いるべき場所”なのです」

淡々と作業をこなしていく。嗚呼、一緒なんだ。故郷というものを持たない、この私と。

私は、借りていた本をもとの位置に戻そうとした。

「ああ、その本は、その棚にはしまわず、ソファの前の机の上に置いておいてください。あとで私が整理します」

「わかりました」

私は研究室を後にしようと思ったが、そこで振り返って、もう一つ、高柴恭一郎教諭に質問をした。

「高柴先生、どうして私の部屋は荒らされたのでしょうか？」

「わかりません。私は貴女ではありませんから。ですがもし、貴女がその件に関して何か悩んでいるのなら、一度気分転換をするといいでしょう。そうですね……本日は生憎の天気ですが、高台から見える景色は、とても良いものだと思います」



その時間は無人のはずの保健室に、人影が一つ、立っていた。そ

の人影は、部屋を見回すと、ぎり、と歯ぎしりをして、部屋を後にした。何かをするわけでもない。ただ、部屋を眺めただけだった。



この学園は致命的と言っていいほど娯楽に欠けている。その上談話室までもが立ち入り禁止となってしまうては、もはや何もすることがないのではなからうか。基本的に寮内では、他の生徒の部屋に入ってはいけないきまりになっている。ただでさえ春休みの帰省で生徒が少ないのに、談話室まで閉鎖されてしまっているのだから。

（尤も、学園側は生徒が少ないからこそ、このタイミングで清掃をすることを決めたのだろう）生徒たちは自室でおとなしくしているしかない。寮内には笑い声一つ聞こえない。

保健室へ入ると、入口付近に花卉が一枚落ちていた。私はそれを拾い上げると、窓際の花瓶のところへ持っていき、その隣に置いた。くまのぬいぐるみは相変わらずそこにあって、こちらを見つめている。

養護教諭の机の上に、小包が一つ置いてあった。持ち上げて裏面を見る。差出人は、美夜だった。速達で届けるように指示した覚えはない。

「気が利くじゃない、あの子」

宛先欄には養護教諭の名前が記されてあった。教諭宛なら、寮母によるチェックは入らない。この時期、養護教諭はほとんど保健室にいない。だから、美夜からのお土産も、チェックされることがないのだ。この時期だからこそ使える裏技。私がそうしてまで欲しかった美夜からのお土産。私は丁寧に包装紙を剥がしていく。中には、片手に収まる程度の小さな箱。

夕方、雨はあがった。雲が晴れたわけではないが、当分の間、雨は降らないであろう。それでも辺りは薄暗い。しばらくすれば日も沈んでしまう。その前に、やっておくべきことをしてしまおう。

今回の事件、動機はやはり、私に対する恨みであろう。その線だと、犯人は上級生、またはそれに準じる人間だと推測される。教師や寮母など、学園の運営に関わる者による犯行の線は極めて薄い。彼女らは、たとえ発覚しないとしても、自分のキャリアを危うくしてまでこんなことをする度胸を持ち合わせてはいない。高柴教諭は例外だが、しかし彼もまたあり得ない。女子寮に男性は入館禁止であるし、彼にはそんなことをする動機がない。何より、彼にはアリバイがある。被害者の私と、同じ部屋にずっと一緒にいた、という絶対的なアリバイが。そうなると、やはり寮内の生徒の犯行ということになる。だが、美夜も言っていた通り、私には直接的にしろ、間接的にしろ、割と敵が多い。その中から犯人を捜し出すのは至難の業だ。

教室棟の屋上の雨は、もうだいぶ捌けていた。乾いた地面が所々見えている。職員室等の暖房の熱気を排出する管がこの真下を通っていて、この場所だけは決して雪が積もらない。手で触ってもわかるくらい温かいのだ。屋上から寮棟を眺める。三階建ての寮で、私の部屋は二階にある。だが角度的に、ここからだとは見ることができないようだ。

「ん？」

私が立っている位置の右前方、隅の方に、何かが落ちている。何か、四角いものが。私は不審に思って、そちらのほうへ歩いていき、それを拾った。表を返す。それは、私が美夜から借り、現在は高柴の研究室にあるはずのあの本だった。

「なんで、こんなところに――」

その理由について思考を巡らせ、答えを出す前に、とん、と軽い

音がして、私は一瞬、宙に浮いた。

「あ」

そして次の瞬間、私の体は重力に従って、屋上から落下する。

「しまっ……！」

空中で咄嗟に体を反転させ、犯人の顔を見ようとした、しかし、闇が視界の邪魔をして、見ることはできなかった。

「くっ！」

私は持っていた本を抱えるように体勢を丸くして、落下の衝撃に備えようとする。だが、それも不十分なまま、私は地面に叩きつけられた。

まず鈍い音が聞こえて、呼吸が止まった。息苦しさを感じながら次第に視野が黒い闇に覆われていく。頭の中は真っ白だった。何も考えられない。私は体を全く動かすことができず、誰かに助けを求めることもできずに、そのまま、意識を失った。

五目

——イメージは海月^{クラゲ}。水の中をただ何となく浮かんでいる。海流の赴くままに漂い、考えることを止め、ただ生物学的食欲を満たすがためだけに生きている。それは、もはや死んでいることと同じだ。そのように昔、誰かに諭された記憶がある。あれは、一体いつの出来事だったのだろうか。

どこか遠くで、誰かの声がする。この声は、以前聞いたことのある声だ。どこだったか、それは思い出せない。でも何故か、ひどく懐かしい気分になって――。

隙間からうつすらと蛍光灯の明かりが眼球に届く。まぶたが重い。全身全霊の力を込めて、ゆっくりと目を開いた。そこにあったのは、私を覗き込む人間の顔。

「起きたようね、如月さん」

「――あ、」

「おっと、まだ体は起こさない方がいいわ。怪我自体はたいしたことないのだけれど、落下の衝撃は相当残っているみたいだから」

そう言われて、思い出したように、体中を鈍痛が襲った。

「だけどホント、あなたって頑丈な体をしているのね。四階建ての棟から落ちて、骨折一つ無いなんて」

私の体をまじまじと観察する。

「確認ね。私のこと、わかるかな？」

ぼやけていた視界が帰ってくる。そこには、見慣れた人物の姿があった。

「――養護の、片岡……片岡遥、先生」

「はい、意識の方も問題ないみたいね。落下の時、頭を打たなかつ

たのは、不幸中の幸いかしら」

「わた、し」

一つひとつ確認するように、私は思考を巡らせていく。そうだ、私はあの時、屋上で。

「如月礼子さん、貴女は教室棟の屋上から落ちたのよ。足を滑らせたか風に煽られたか知らないけどね。私の興味はあなたの現在の健康状態だけだから」

そう言いながら片岡教諭は、私の体温や脈を測っている。

「……で、動かせそうですか、私の体は」

「ええ、健康管理上問題は無いわ。しばらくの間は多少、痛みが残るでしょうけど、そこはあなたの意志次第、というところかしら」

「そうですか——っ！」

勢いをつけて上半身を起こす。背中に鈍痛が走るが、腕や足に異常は感じられなかった。

「……私、どれくらい眠っていたんですか？」

まぶたの重さから、少なくとも半日は眠っていたと思うのだが。

「そうね……あなたが倒れているのを高柴先生が見つけてから今までずっとだから、十四時間くらいかしら」

「そうですか……私を運んでくれたのは高柴先生なんですか？」

「ええ。せっかくのスーツも泥でぐちゃぐちゃになるくらい、必死であなたを抱えてきたわ。こっちの方が驚いたくらいよ」

思い出して、片岡教諭からは笑みがこぼれた。

「雨上がりで地面が濡れていたことも、落下時のショックを和らげる要因になったのでしょう。ラッキーガールね、あなたは」

「……こんな怪我して、ラッキーはないでしょう、先生」

「あはは、そうね。それじゃ、私はいろいろ報告に行かなくちゃいけないから、しばらく留守にするわ。服はそこに置いてあるから。気付いてないみたいだけど、今のあなた、相当なセクシーガールでもあるのよ」

軽く手を振って、片岡教諭は保健室を出て行った。私はシーツを

体に巻きつけたまま、着替えに手を伸ばした。



部屋に入ると、ベッドの上に、一冊の本が置かれていた。タイトルは“路地裏の猫”。いつかの本だった。それを見ると、慌ててその本をつかんでポケットの中に隠した。なぜ、どうして、この本がここにあるのか。それが、全く理解できなかったからだ。

誰にも見られないようにするため、部屋の鍵をかける。そして、その本の頁をぱらぱらと捲った。すると、小さな紙切れが頁の間から滑り落ちる。そこには、綺麗な字でこう書かれてあった。

『“あの場所”で、待ってる』



私は生憎、無宗教だ。神様なんて信じていない。だけど、そんな私でも一度だけ天に祈ったことがある。あれは、小学生最後の運動会るときだった。当時、すでに両親は離婚しており、私は母と二人で暮らしていた。著名な弁護士だった母は毎日のように仕事に追われていて、なかなか休みを取れるような状況ではなかった。それこそ私は理解していたし、そんな彼女を私は尊敬していた。だけど、そのときだけはどうしても母に見に来てほしかったのだ。

『かみさま、お願いします。ほんの少しの時間でいいですから、お母さんが私の運動会を見に来てくれますように』

……結局、その願いが叶うことはなかった。

鉛色の扉が、軋みをあげて開かれた。下を眺めていた私は、その音が鳴ると共に振り返った。そこに現れた人物が、私に関わるこの一連の犯人――。

「こんにちは、赤羽さん。奇遇ね、こんなところで会うなんて」

「――如月、礼子」

ぐっと握っていた両拳をさらに固くして、赤羽真奈は私を直視した。

「自分で言うのもなんだけどさ、こんなところから落ちて、よく無事だったわね、私。打ちどころが悪かったら死んでいたかもしれないのよ。……ねえ、そのところ、貴女はどう思っているわけ？」

そんな私の質問にも、彼女は表情一つ変えずにいる。

「私の運が良かったのかしら、それとも、ただ単に貴女の運が絶望的に悪かっただけかしら」

すると赤羽は、持っていた本を私の足元に投げ付けた。

「なんで、」

赤羽は唇を震わせている。

「なんで無事なのよ、貴女は――！」

思いのたけを、抑えられなくなった感情を、私にぶちまける。はーっと一呼吸整えて、彼女は私に質問した。

「……どうして、私だとわかったの？ 突き落とした時、貴女には顔を見られていないはずなのだけれど」

……まさかそんなにストレートな質問が来るとは思っていなかった。赤羽真奈の本性が、顔を覗かせる。

「最初は些細なことでした。私の部屋が何者かによって荒らされた時、何故か、くまのぬいぐるみだけは無事だった。ベッドの隙間に落ち込んでいたから、偶然惨禍を免れただけかと思っていたのだけど、それは違う。だって、私の荷物を隅から隅まで調べ上げた犯人が、ちよっと覗けば容易に見つけられるはずの、あのぬいぐるみを見落とすわけがない。ならば、あれが傷つけられなかった理由は別

にある、そう考えたんです」

美夜は言っていた。あのぬいぐるみは、一年前の高等部新入生歓迎会で贈られたぬいぐるみである。だから、二年生の時に転入してきた私の持ち物であるはずがないのだ。

「あのぬいぐるみは私のルームメイト、金子美夜のものです。それを貴女は知っていた。なぜなら、貴女自身が彼女に贈ったものなのですから」

これも彼女^{みや}から聞いた話だ。

「それで、ぴんときたんです。未確定ではありませんでしたが、容疑者リストに貴女の名前が入った」

私にとっては、それだけで十分だった。

「あとはもう、賭けみたいなものです。私は貴女に賭けた。貴女が犯人であると、ね」

にっ、と笑って見せる。

「そう……それだけの理由で、私の部屋にあんな伝言を残したわけ？ とんだ度胸の持ち主ね」

「それに関しては、別に何も問題はありませんでした。あの伝言を見て、貴女はここに来た。それだけで十分です。というか、貴女がここに来なければ、この事件は永遠に闇の中だったでしょう」

だが、彼女なら絶対に来るという自信はあった。赤羽真奈は、やたらとプライドが高い、お嬢様だからだ。

「……ふふふ、面白いこと言うのね、如月さん。だけど貴女、重要なことを忘れているわ」

赤羽は、邪惡な笑みを見せる。

「私は、この学園の生徒会長。中等部からずっとこの学園で生活してきたのよ。でも貴女は、たかだか一年いるかいなかの小娘に過ぎない。さて、学園の皆さんはどちらの言うことを信用するかしらね」

そうきたか。確かに、それがネックだった。彼女とまともにやり合えば、私が圧倒的に不利であることはわかっていた。

かつかつと靴の音を響かせて、赤羽は私に向かって歩いてくる。だけど私だって、そこに頭が回らないような馬鹿じゃない。

『どうして、私だとわかったの？ 突き落とした時、貴女には顔を見られていないはずなのだけれど——』

ぴたり、と赤羽の歩みが止まる。私はポケットからその音源を取り出した。ハンディサイズのボイスレコーダー。美夜からの贈り物だ。レコーダーの停止ボタンを押す。

「確かに、まともにやりあえば私に勝ち目はない。でも、貴女自身の声だったら、みんなも信じるのではないかしら？」

ぎり、と歯ぎしりをする音が聞こえた。

「こ……の、卑怯者——！」

次の瞬間、赤羽が私に飛びかかってきた。私の首をつかむと、そのまま押し倒す。その衝撃でレコーダーが、からからと音を立てて地面を滑る。あまりにも咄嗟のことで、不覚にも反応することができなかった。

「お前さえ、お前さえいなければ、何もかも全部、上手くいったのよ！ お前さえいなければ！ 私は！ 今でも——」

首にかかる圧力がさらに強くなる。やばい、すぐ背後は、一度経験済みの奈落だ。

「ふ、ふふふ、ねえ、如月さん。貴女、ここから落ちて、一度、死んだのよ。でも何を迷ったか、この世にとどまっている。死人はおとなしく、あちら側にいきなさい。なんなら私が、手助けしてあげてもいいのよ」

「く、こっの、馬鹿力っ……いったい、何食べて、こんな……！」

「あら、失礼ね。ささやかなパンと、新鮮なサラダだけよ」

赤羽の瞳孔が開いている。この女、正気じゃない。でも、本気で私を殺そうとしている。

「やめ……ろ——」

まともに呼吸ができない。病み上がりの意識は、あと数十秒ももたないだろう。この時ばかりは、さすがの私も覚悟した。だが――

「もうやめて下さい！ 赤羽君！」

屋上の扉が勢いよく開かれ、一瞬、私の首にかかる赤羽の圧力が弱くなった。その隙に、私は彼女の腹部を蹴り飛ばし、難を逃れる。

「――あ」

突如現れたその人物は、私と赤羽の間に割り込むと、私に背を向け、両手を横に伸ばした。

赤羽は、私の首を圧迫したおかげで真っ赤になった自分の両掌を見つめている。

「どう、して、先生」

「もうやめて下さい。私は、貴女が人を殺すところなんて、見たくありません」

高柴恭一郎は悲痛な顔で、そう、赤羽真奈に諭した。

「あ、あああ、あああああああああ！」

彼女は絶叫する。そして、崩れ落ちた。とめどなく涙があふれ、彼女自身の顔を滅茶苦茶に濡らして、赤羽真奈は、ただ、泣き叫ぶだけだった。

その後

「首の痣は、たいしたことないようですね」

私は保健室のベッドに座っていた。高柴恭一郎は、その正面にある来客用の椅子に腰かけ、私の首元を覗きこむようにしてそう言った。

「片岡先生も、しばらく経てば戻ってこられるようです。あ、コーヒー、いかがですか？」

高柴は私の返事も待たずに、勝手に二人分のコーヒーを淹れ始めた。その素振りからは欠片も邪気は感じられない。だが、私はどうしても彼に聞かなければならないことがある。

「高柴先生、私は今回、先生に助けられました。もしあのまま赤羽が私を落としていたら、間違いなく命を失っていた。だから本来なら、先生に感謝しなければなりません。———ですが、今回だけは、そうすべきではないと思っています」

相変わらず高柴は柔和な表情を浮かべている。

これは私の憶測にすぎないのですが、と前置きをする。高柴からコーヒーを受け取り、彼の表情を窺った。高柴は、私の言葉の続きを促すように、軽く目を閉じ、頷いた。

「私は、高確率で高柴先生と赤羽真奈が共犯関係にあるのではないかと思います。それは先生に悪意があるうとなかろうと、です」
「……どうして、そう思われるのですか？」

高柴は表情を変えない。ただ手元のコーヒーから上がる湯気を眺めているだけ。

「理由は二つあります。一つ目は、私の部屋が荒らされた時のことです。犯人は私の私物の全てを破壊していた。それは五分や十分でできることではありません。もし、途中で私が引き返してきたら、あっという間に事が露見してしまいます。逆にいえば、犯人はしばらく私が自室に帰ってこないという確信があったことになる」

実際、私はあの研究室に約一時間もの間、高柴と一緒にいたのだ。「二つ目は、私が突き落とされた時、屋上にあったあの本です。これは決定的だと言ってもいいでしょう。あの本の存在を知っているのは、私と私のルームメイトの金子美夜、本を没収した寮母、そして査定をした高柴先生だけです。特に高柴先生は、あの本を保管していました。――高柴先生、あの本を赤羽真奈に渡しましたね？」

赤羽が要求したのか、高柴が助言をしたのかはわからないけれど、結果的に私をおびき寄せる餌として、あの本を利用した。

高柴は、こくりと頷いた。

「どうして、こんなことをなさったのですか？」

真相が、彼の口から語られる。

「……赤羽君とは、昔からの付き合いでした。私がこの学園に赴任したのは、ちょうど彼女が中等部に入学してきたとき。……何故、この規律には厳しい女子学園に、私のような男性教師がいると思いますか？ 普通ならあり得ない。それを可能にしてくれたのが、他でもない彼女だったのです」

居場所のない彼に、いるべき所を与えてくれた。それが、高柴が赤羽に協力した理由。

身寄りも友人もない高柴恭一郎が、どのようにして赤羽真奈と出会ったのかはわからない。たぶん、どうってことのない偶然だったのだろう。でも、その偶然が、何もなかった高柴に居場所と存在意義を与えたとしたら、それを奇跡と呼ばずに何と呼ぶ。少なくとも高柴は、そう思っているのだ。

「絶対に許されない行為だとは理解しています。ですが、勝手なお願いかも知れませんが、どうか、彼女のことだけは、これ以上責めないであげて下さい」

高柴は、自分の額が膝に付くくらい深く、私に頭を下げた。

それからのことを私はよく知らないのだが、赤羽真奈は、外国の姉妹校に留学することになった。どうやらこの話は以前からあったようで、当の彼女はずっと渋っていたのだが、高柴の説得で実現することになったようだ。するとすぐさま準備を整えて、わずか数日で彼女は逃げるように銀聖学園を後にした。

そして高柴恭一郎は、赤羽が留学先へ発った翌日の早朝、退職届を出して学園を去った。その後の彼の足取りを知る者はいない。

主を失った部屋は、それだけで寂れてしまったように見える。高柴恭一郎の研究室は、第二図書館になる予定だという。私は、その整理を任されてしまった。といっても、机の上に積まれている十数冊の本を棚に戻すだけの作業なのだが。

積まれた本を整理していると、その一番下に、折りたたまれた便箋を見つけた。まさか、と思って開いてみる。そこには細くて綺麗な見覚えのある字があった。

如月礼子様

貴女がこの手紙を読む頃には、私はすでにこの学園を去っているでしょう。そして貴女がこの手紙を読んでいるのも偶然ではありません。私が事前に学園長にお願いして、貴女がこの部屋の整理をするように手を回しておきました。

「……はあ、手の込んだことを」

だが、彼らしいと言えば彼らしい。自然と表情が緩んだ。

私がこの手紙を貴女に書いた理由はいくつかありますが、その一つは貴女の疑問を解決するためであります。きっかけは、貴女が記入

した貸出帳をチェックしたためです。

以前、私は“言仲鞍馬”という小説家のことを知らない、と言いました。しかし厳密には、あれは嘘を言ってしまったことになります。すみません。というのも、貴女が持っていた小説の“言仲鞍馬”は二代目であり、初代“言仲鞍馬”は、あの、タイトルが無い本の作者のことを指すのです。初代“言仲鞍馬”は、私の友人でした。そしてあの本は、彼自信の半生を描いた自伝なのです。ですから多少、読みにくい部分があったかと思います。

さて、図々しいようですが、一つ、貴女にお願いがあります。私が貴女に手紙を書こうと思った理由の二つ目でもあります。それは、あのタイトルの無い本を是非引き取ってほしいのです。都合上、私が持つていくことはできませんでした。ですが、あのまま学園内に埋もれてしまうのは、非常にもったいない。それに、あの本が、いつか貴女の役に立つであろうと確信しております。貴女を騙し、そのうえ貴女の命をも奪いかねなかった私が頼める立場で無いことは重々承知しております。ですが、もし、私の頼みを受けてくれるのなら、これ以上の喜びは無いものと思っております。

残りの学園生活もわずかですが、どうか健勝でお過ごしください。

高柴恭一郎

「……まったく、勝手な先生だよ」

私はそうつぶやくと、黒いハードカバーの分厚い本を持ち上げた。タイトルの無い本。言仲鞍馬という小説家の半生を描いた物語。私は高柴恭一郎の手紙をその本の頁の間に滑り込ませ、右腕で抱えた。そして研究室の扉を開け、一度だけ振り向いて、そしてその部屋を後にした。

——それから私は卒業まで、二度とその部屋に入ることはなか

つ
た。

エピローグ

『———そうでしたか。赤羽先輩、留学されたんですね』

「ええ。まあ以前からその手の話は何度もあったらしいけどね。やつと落ち着いた、ということかしら」

電話コードを伸ばして、私は横着にも保健室のベッドの上に寝転がって美夜と話をしていた。

「ああ、そうだ。ありがとね、美夜。お土産」

あの後結局、水に浸かって壊れてしまったのだけれど。

『はあ、お役に立てて光栄ですが、どうお役に立てたのかは推測もできませんよ……』

「まあそのうち話してあげるわよ。そうだ、美夜。ちょっと聞いていいかしら？」

『何でしょう？』

「ずっと守ってきた地位を余所者よそものに奪われることは、やっぱり屈辱かしら？」

一拍、間があって、美夜は答えた。

『どうでしょう。私程度の人間だったらあまり気にはしませんが、でもプライドの高さに比例して嫉妬心も増大するのではないでしようか』

そう。これが、赤羽真奈が私に憎悪を抱いた原因。入学以来、ずっと守ってきた成績トップの座。それを、四月の途中に入学してくるような無粋者わたしにあっさりと奪われてしまったのだ。もちろん、最初は彼女もそれなりに納得し、さらに向上しようと努めただろう。だけど、それが二回三回と続くうちに、きっと彼女は気付いてしまった。赤羽真奈は、如月礼子には敵かなわない。

そこで彼女は考え方を変えることにした。それが、私への生徒会勧誘だ。自分より優秀なものを自分の配下に置くことによって優越感に浸り、無理やり自分を納得させようとした。だが、私はそれを

断った。

“——その程度の人間が彼女の隣に並んで立てるはずがない。それはもう、決定的な能力の差だ。”

そこから彼女の方向性は狂い始めたのだろう。手の内に収まらないのなら、いつそのこと、その存在を消してしまえ、と。

「……哀れだね。そうなってしまったら、もう救われない」

一生、憎悪と向き合っていくか、その憎悪の対象から極限まで離れるしかない。そして彼女は、結果的に後者を選択したことになる。『先輩、この後、どうするんですか？』

「どうしよっかなあ」

電話コードを小指に絡めながら、私は考える。保健室の暮らしは特に不便ではない。ただ、夜眠るごとに真っ裸にならなければいけない（洗濯のため、少なくとも下着は脱がなければならない）のは、憂慮すべき事態だ。どの道、外で新しい日用品を仕入れる必要がある。それなら。

「ねえ、美夜の実家、旅館だったっけ。今、忙しい？」

『いえ、この時期は割と暇だったりしますよ。今日もお客さんはどこかの大学のサークルだけで、両手の指で収まる人数だったりします』

「そう——。ねえ美夜、面白い話をしてあげようか」

『はい？』

なんでしよう、と美夜は無邪気に尋ねてくる。

「ある一年生の女の子は、どうやら学園内に秘密ルートを持っているらしいのです。そこから彼女はお気に入りのお菓子や文庫本、アクセサリーなんかを調達していました」

受話器の向こう側で、がたんという音がした。しばらく沈黙が続いて、絞り出すような声で美夜は答えた。

『よ、要求はなんですか』

「あら、どうかしたの、美夜？ 私はあくまで“ある女の子”の話をしていただけ」

おほほほ、と電話口で高笑いしてみせる。

「でも美夜が、好意で私のために何かをしてくれるというのなら、ありがたくお世話になろうかしら。……そうね、女の子一人が安心して泊まれる部屋その他諸々。和風旅館だと嬉しいかな」

『おかーさ……、ごめんなさいごめんなさい、女将さん！ お客さんもう一人追加で！ 私のオトモダチです！ ……これで満足ですか、先輩？ あれ……でもどうやって岩手^{こち}まで来ます？』

その点は、全く問題ない。私はポケットから一枚の封筒を取り出した。

「今、私の手元には、どこかのうっかり者が残していった切符があるから大丈夫よ。しかも、運良く岩手行きだったりして」

この春は、快適なオフを過ごせそうだ。

事件が発生して以来、私は久しぶりに森の中を散歩していた。今日は気持ちがいくらいの晴れ。顔を上げると木漏れ日が美しく射しているのが見えた。

「うーん、」

ぐぐつと背伸びをする。まだ背中が少し痛む。でも、それもだいぶ慣れてきた。養護の片岡教諭は、あと数日で完治すると言っていたけれど、むしろ私は、今後の戒めとして残しておきたい痛みだと思った。

戒め。そう、私は今回、色々と危険な目にあった。私に致命的に欠けているもの、人の心を知り、行動を読み、己に降りかかるのであろう火の粉を取り払う力。俗に処世術といわれる能力だ。

「でもまだ、いいよね、少しくらいモラトリウムでも」

あの日、私の部屋が荒らされた時、私は楽しかった。あの惨状を見て、背筋がぞくぞくするほど楽しかったのだ。自身に向けられた明確な悪意。ああ、私はこれを解決しなくてはならない。そう思っただけで、気絶しそうなほど興奮した。

自然と笑みが零れる。たぶん私も、この銀聖の異様な雰囲気にとてられてしまったのだろう。そしてきつと、赤羽真奈もその被害者の一人。

だから私はこの事件を公表するつもりはさらさら無い。別に誰かに口止めされたわけではないけれども、それが誰にとっても最善の選択だと思うから。

「さて」

そろそろ部屋に戻って荷造りを始めなければ。とはいっても、もう私の荷物はほとんどない。あるのは、後輩たちにカンパしてもらった旅費くらいだ。

どこまでも冬で、そして、どこまでも冬だった。

だけど、春の兆しは所々に見え隠れしている。それは動物だったり植物だったり、大気だったり雰囲気だったり。実はもう、すぐそこまで迫っているのかもしれない。

そう思うと、少しだけ嬉しくなった。春は、私の好きな季節であるからだ。とりあえず美夜の実家で休暇を満喫しながら、新しい季節が訪れるのを、のんびり待とうと思う。

エピローグ（後書き）

ちよつとした疑問、質問等受け付けます
評価・感想欄にどうぞ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8581h/>

氷花、凜として咲く

2010年10月10日22時54分発行